から人間によって決定される地理学へのゆっくりとした変化、第二に神の創造した世界を洞察するものとしての地理学から世俗化した地理学への変化、第三にフンボルトによって作られた「地理学者・研究旅行家パラダイム」が現在終末を迎えたことである。十数人の地理学者たちは、これらの非常に大きな視点によって、ルースながらもひとつの地理学史にまとめあげられ、ただの寄せ集めになることを免れている。しかも各地理学者の記述は三つの視点にしばられることがなく、それぞれの論点を持っている。地理学の全時代的な流れと、地理学者個々の展開とが、巧みに組み合わされている。

ひとつひとつの論点については、例えばフランス地理学において（フランスについて論じるのは珍しい）、ブラーシュよりもエリゼ＝ルクリュを評価するなど興味深い点が多いのだが、一々言及する余裕がない。ただ一点のみ、ベックが地理学史の観点から、現在のヨーロッパ地理学の状況をどうとらえているかについて紹介しておきたい。ベックは本書の最後をラウテンザッハとトロールで締めくくっているが、この二人の死（一九七一年・一九七五年）によって、上述したフンボルト以来の「地理学者・研究旅行家パラダイム」が終わりを告げたと述べる。そしてドイツにおいても人文地理学（Kulturgeographie）の時代・計量的試みと実験の時代が始まったとしている。これは全く人間によって決定される地理学の時代であるともいう。数多くの旅行家たち・地理学者たちを扱ってきたベックの言には味わうべきものがある。

最後にベックの研究が常にヨーロッパに限定されていることを付記しておこう。彼の研究の背景には、シュミットヘンナーに基づく文化圏の考え方があり、個々の入り乱れを避けるため、地理学史研究をヨーロッパ文化圏に限っているものと考えられる。だがヨーロッパに閉じこもってしまうのはやはり惜しまれる。

しかしながら本書は長い目でヨーロッパの地理学史をよくまとめており、今後の地理学史研究のうえで見逃すことのできない貴重な成果であると言うことができよう。

（二九四頁　一九八二年　Berlin: Dietrich Reimer Verlag）

（小田匡保　京都大学大学院生）

M. J. Webber Explanation; Prediction and Planning
——the Lowry Model——

カナダの McMaster 大学教授である著者は、情報理論をとりこむことによって都市の空間構造を、より精密に記述し理解するということに努めてきた地理学者の一人である。著者はハミルトン市を事例として、都市の空間構造に関する操作的モデルを構築することを試み、それは前著である『情報理論と都市の空間構造』（一九七九、Croom Helm, London）にまとめられた。本書は著者のそうした一つの関心を反映したものであり、一応前著の内容の延長線上に位置する著作であるとみなすことができる。本書では、とくに Lowry モデルという操作的な都市モデルを議論の中心に置いて、地理学と都市計画においてそれがどのように用いられるかについて考察する。

本書の構成については、以下に述べる三つの問題に答えていくという形で展開される。① Lowry モデルとはどのようなものであり、どのように発展し、使用されてき

たか。②Lowry モデルの基礎となる理論はどのようなものであり、それは経験的にどのようなはたらきをするか。③Lowry モデルとその基礎となる理論は、都市空間の理解のためにどのような役割をはたすのか。

第一の問題に対する解答は、第二章と第三章で与えられる。第二章は Lowry モデルで用いられている諸概念を記述し、Lowry モデルが関与した一九六〇年代のアメリカ大都市地域における戦略的な都市計画と、一九七〇年代の都市計画における操作的モデルの歴史について考察する。第三章は Lowry モデルの操作化とその解析を示し、Lowry 自身によるピッツバーグを事例としたモデルの応用について詳述する。

第二の問題に対する解答として構成された第四章から第八章までの五つの章は、Lowry モデルの各要素を詳細に分析し、それらが都市における現象を記述し予測する能力について評価する。第四章は Lowry モデル(一九六四)以後の空間的相互作用論におけるいくつかの展開について述べ、それらを経験的に検討する。第五章は Lowry モデルによって用いられた住居とサービスの立地モデルについて論じる。また Lowry モデルは単純な方法で集計的な都市経済を表現しているので、第六章はモデルを改良するという目的から、都市内の工業立地に関する代替的な集計的都市モデルを提示し、それについて論じる。

Lowry モデルを構成する諸要素に関する以上三つの諸章につづいて、第七章と第八章ではモデル全体について考察される。この二つの章では、モデルの経験的価値とその修正が強調されるが、それは予測的にモデルを用いるプランナーにとくに関係のある問題である。第七章は Lowry モデルに関する最近のいくつかの発展と、そうした改良をとりこんだモデルに対する経験的評価について論じる。第八章は通時的な都市構造の変化を分析するという目的で、Lowry モデルを用いる際の諸問題を論じる。

第三の問題に対する解答に相当する第九章から第十一章までの三つの章では、よりアカデミックな視点から、Lowry モデルが都市の現象を理解するのに役立つということに対して考察される。第九章はプランニングのモデルと科学的モデルの相違について述べ、プランナーにとって必要なのは説明ではなく、予測であることを示す。そして、都市社会を説明するのに役立つ、科学的モデルとしての Lowry モデルが批判される。第十章では、都市内の工業立地の変化の事例を用いて、モデルとその理論的構成要素によって与えられるそうした説明の限界が示される。第十一章はそうした批判と限界をふまえて、代替的な操作的モデルとして動学的都市モデルを提示する。

最後に、第十二章で最近のモデル構築と計量地理学における諸成果が概観され、それらが Lowry モデルとどのようなかかわりをもつかについて考察する。それによって、本書の各章の議論が整理・統合される。

本書は、前著の内容を継承・発展させようと試みられたものであると同時に、Lowry モデルという一つの操作的モデルを手がかりとして、より広汎な問題意識を表明しているという点で、前著とはやや目的を異にする研究であるといえる。とくに説明と予測の区別など、方法論上の諸問題にまで論及しているという意味で、著者のもつ問題意識の広がりを読みとることがで

きる。また、計量地理学の第二・第三世代ともいうべき著者が、都市の空間構造というすぐれて複合的な現象を研究対象として、モデル構築という方法でそれにアプローチしようとしたことは、計量地理学における個々の独立したテーマが、都市モデルの構築という問題を通じて統合されようとしている最近の研究動向に呼応したものとみることができる。

（二一三頁　一九八四　Pion Limited, London）

（松田隆典　京都大学大学院生）

会告

去る六月七日に開催された昭和六十一年度春季定例理事会・評議員会において、次の案件が承認可決されました。

一、昭和六十年度決算報告及び昭和六十一年度予算案

一、役員交替

(1)理事長水津一朗、理事本田實信、評議員田村満穂氏の退任。

(2)理事長に越智武臣、理事に狭間直樹・（以下評議員より）足利健亮・応地利明・堀川哲男・間野英二、評議員に中村幹雄・大谷敏夫氏を選任。

(3)常務理事に山中一郎氏を選任。

なお旧常務理事紀平英作氏は評議員に復帰。

一、先に計画していました『史林』復刻の件は都合により中止となりました。

編集後記

暑いなかにも、だんだんと秋の気配を感じるようになりました。第六九巻第四号をお届けします。最近ようやく原稿の集まりが順調となり、本号では論説四、書評二、紹介二という充実した内容となりました。十分にご検討下さい。

最近のひとつの傾向として西洋史関係の力作が数多く寄せられていますが、編集委員としてそれにご尽力された上垣豊氏が、このたび交替されることになりました。

なお、このたび昭和六一年度科学研究費補助金「研究成果促進費」の交付が決定されました。

（秀）

一九八六年六月二五日印刷
一九八六年七月一日発行　定価一〇〇〇円　送料五〇円

史林　第六九巻第四号（通巻第三三八号）

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

発行人　史学研究会
振替京都七―五一五五番
理事長　越智武臣

京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
印刷所　中村印刷株式会社